

このことを自覚せる哲學は反科學的態度に對して科學的態度の保證者となる。哲學は科學的思惟の維持といふことの中に人間の尊嚴性の不可缺の條件を見る。哲學はメフィストーフェレスの警告を眞理として認める——

どうとも勝手に、理性や學問を、

人間の至高の力を、輕蔑するが好い。

奴、それだけでもうこつちのものだ——

附記 これは Revue philosophique 一九三九年一、二月號所

行爲の表現的性格

木村素衛著「表現愛」に就いて

柳田謙十郎

木村氏の新著「表現愛」を手にして眞先に感じたことは此の著者の個性があまりにも美しく此の書物の到る所に躍つてゐるといふことであつた。内容と装幀とが心憎いほどにピタリと合つて、ザラザラとしたその布表紙を

載 K. Jaspers. *Essence et valeur de la science*, traduit par Jean H. Polnow. を譯したものである。佛譯からの重譯であるため、原文の意味を出すことに苦心をしたが、幸ひ一九三八年に出た彼の「質存哲學」の一部に自然科學に關する敘述があり、この論文と類似した箇所も少くないので、それを参照しながら譯した。尙譯出に當つては三宅剛一先生に始終輔導をしていただいた。先生の平素の學思に併せ、ここに深甚の謝意を表する次第である。最後のメフィストーフェレスの言葉は阿部次郎先生譯のファウストから借用させていただいた。

手先でなでてゐると恰も著者の着物に觸れてゐるやうな思ひがする。集められた論文も皆著者獨特の調子の高さを示したもので、論文集といふよりはむしろ作品集とも呼びたいほどに藝術的な香りの豊かなものである。就

中「ミケルアンジェロの同心」の如きは恐らくは著者會心の作であらうが、西田先生の「ゲーテの背景」を思はせるやうな高き哲學と藝術との融合の世界を示してゐる。嘗ては著者自身も *non omni unice* への憧憬に燃えて青年らしい瞳をかがやかして天の一角を見つめたことはなかつたか。やがては來るべき運命のヴァットリア・コロンナを想うて夜半寢具の襟を濡ほしたことはなかつたか。ただに十六世紀の一天才を回想するにしてはあまりにも痛々しい現實感にあふれたものではないか。筆者もかのミケランゼロが、一五四七年ヴァットリアの死後、包んでも包んでも包み切れない彼女に對する哀惜の情を、ひたすらにピエタの制作の中に注ぎ込んで三度び石に向ひつつ三度び共未完成のままにそののみを置いた、——フロレンスのドムの四人の群像、パレスチナの聖ローザリア寺院の三人の群像、そして最後にローマのパラツォ・ロンダニニの二人のピエタ、最初にアリマテアのヨセフが消えた、次にマグダリアのマリアが消えた、最後に殘された聖母と二人きりの基督の像は破壊の程度も

未完成の程度も最も甚だしいもの、彼がこの未完成像を通じて見きはめやうとした見果てぬ夢は果して何であつたであらうかといふ同情を越えた著者自身の悲痛な自己表現を讀むに至つて雙眸の曇りゆくのを抑へることができなかつた。そしてそこに挿まれたロンダニニのピエタ像の寫眞をデツと見まもつた時、とめどもなくあふれ來る涙に、そのまま机の上になうつぶして心ゆくばかり嗚咽してしまつたのである。

だがしかし學術的に見て最も客觀的價値の高く看過することの出來ないものは何といつても卷頭の論文「表現愛」であらう。その根本的な立場は西田哲學的な行爲的直觀の辯證法にあり、深くその影響の下に立つてゐるものであることは云ふまでもないが、藝人肌とも云ひたいやうな綿密な思索力と自由無比な直觀的表現とは、此の著者ならではつひに見ることの出來ない獨特の世界を展開せしめてゐる。著者によれば表現とは内を外に表はすこと、精神を自然に於て實現することであるが、しかしそ

これは我々が單に主觀的能動的となることによるのではない。表現の世界にあつては内が即ち外であると共に外が即ち内なのである。我々の行爲は單に主觀の底からのみ起るものではなくて主觀が客觀を限定し客觀が主觀を限定する主客相即的な相互限定の底から起るのである。故に我々の自己は單なる自然でもなく又單なる精神でもなくて、一の歴史的身體的なる存在として、形成作用的に己自身を限定する表現的生命の自己限定といふ意味をもつたものである。我々の自己は慥かに一の身體的存在であり、身體といふものを離れて自己といふものは考へられないが、しかし此の場合の身體とは自然と精神との單なる *entweder-oder* の立場からは到底處理し切ることの出来ない矛盾的自己同一的な性格をもつたものである。身體は我々の自己にとつて内なるもの(我々自身)であると共に外なるもの、我々の働きの素材となり道具となり、さては客觀的對象とさへもなるものである。かかる意味に於ての外なるものが内なるものを呼び、内なるものが外なるものに應へる、その呼びかけと應答との相

互限定の底から新なるものがイデヤ的に作られてゆく、そこに歴史的形成的な我々の行爲といふものがあり、かかる行爲のある所、そこに眞の自己といふものがあるのである。我々の自己は外からの呼びかけ語りかけに應じて内から外を限定する時、何處まで自由意志的に決意するもの、傳統的なるもの過去のなるもの一切から一とまづ己自身を切斷し、絶對無限定的なるもの底からイデヤ的に自己自身を限定するものと考へられるが、しかも自己がそれから自由に切斷すると考へる所の外なるものとは、自己にとつて全く無縁な他者であるのではない、それ自身作られたものとして、内もそれに於てあり外もそこに於てある所の表現的生命の自己限定といふ意味をもつたものである。我々の自己が外なるものに對するのは決して單なる物質に對するのではない、表現的な物に對するのである。此故に我々は物と表現的に相對立し、物の呼びかけに應じて答へるものとなるのである。従つて又我々の行爲的自己在が自覺するイデヤも亦、單に自然に敵對的に對立する自我の自發的自己限定

にのみ基いて生ずるのではなく、かかる行爲的個體をば自覺點として有する表現的生命そのもの内から、換言すれば外と内とを辯證法的契機として有する表現的世界そのものの底から生れるのである(二二頁)。外は傳統として内を培ひ、内は創造的精神として傳統を止揚し、かくの如くにして歴史の實在は動いてゆくのである。見究めることの出来ない悠久なる成るもの——歴史的自然の中にあつて自覺的にこの表現的生命の營みに參與するもの、それが即ち個體的人間である。文化とは單なる自然の征服といふが如きことにあるのではなくて、むしろ我々が歴史的實在の内にあつて自覺的に實在を育成することではなければならない。歴史的世界は限りなく深く我が自覺的行爲を内に包んで動いてゆくのである(二三頁)。

大體に於て此の如き立場から著者は身體と精神の問題を鋭く分析し、道具としての身體の考察から、離身性と代用可能性と公共性とをもつた所謂道具の表現的性格を論じ、更にそこから超身性をもつた機械への發展の必然

性を明かにすると共に、更に第二部表現愛の構造に至つては、かかるイデア的制作的な行爲的人間のエロスの努力がその根柢である所のアガペ的な表現愛の世界といかに深く矛盾的自己同一的に相結ぶものであるかを明かにしてゐるのである。これらの所論を通じて著者と筆者との間にはあまりにも相近き立場の一致があり、殆んど批評の餘地の殘されてゐないほどに自己同一的なものあることに自ら不思議を感じる位なのであるが、ここに書評といふ立場から強ひて取り立てて二三の氣づいた點を述べて見るならば

第一、我々の行爲的世界がその根柢をば表現的世界の自己限定にもち、我々がその行爲的現在に於て自由意志的に自己自身を限定するといふことが、更に深くは表現的世界の自覺的創造的契機としてその中に包まれるといふことについては筆者も亦異論なく之を認めるものではあるが、本書にあつてはかかる表現的立場といふものが高調するのあまり、個體的行爲の之に對する疎外的自己否定的性格といふものを比較的軽く扱ひすぎてゐるとい

ふやうな憾がないでもない。行爲が表現につつまれるのはそこに何らの否定作用もなしに圓の中に圓が含まれる如くに包まれるのではない。行爲と表現との間には何處までも調和することの出来ない絶対矛盾的對立といふものがある、我と汝とは常に絶対否定の深淵を距てて相對立し相限定するのである。故に我々の歴史的現實の世界にあつては凡ての表現的なるものは我々の行爲的自己に對して絶対の他者として之に迫るものである。表現が行爲を否定すると共に行爲が表現を否定する所に形成作用的な歴史的世界の現實といふものがあるのである。行爲はどこまでも表現的世界の中に留まるものではなくて之を越え之を否定し之を破りゆくものでなくてはならない。しかもかく限りなく自己を破つて自己の外に出てゆく前進の歩みが更に深く自己自身の表現的性格をあらはにするものである所に、前進即還歸、還歸即前進としての表現的生命の辯證法といふものがあるのであらう。

第二、エロスとアガペとの問題については筆者も亦會て同一の問題をば一種のパトスを以て取扱つたことがあ

行爲の表現的性格

り（拙著「辯證法的世界の倫理」参照）、興味深く讀まれたのであるが、著者の如く最初から表現愛の立場といふものを打ち出した後そこから出發してエロスの限定への道を見出して行くといふ道をとることは、眞に始源的なるもの全體なるもの全體的なるもの確立といふ點から見て誠に聰明な扱ひ方であり、全體の論述を具體的ならしむるためにきはめて有利な方法であると考へられる。唯筆者も最近になつて氣づいたことであるがエロスとアガペとは元來對立矛盾の相對的關係に立つものではなく、イデア的なエロスの努力の文化理想主義の立場に對して眞に他者として立つものはむしろ感性的自然主義であり、未來的創造の無限の前進に對してあくまでも過去の世界に留り、そこに己自身を物質化して枯息な本能と習俗の夢を繰りかへさんとする保守的快樂主義であらう。アガペの世界はこの兩者の絶対矛盾的自己同一としてその實踐的苦惱の現實の底から自覺されて來るものであると考へられる。

第三、著者は大體に於てポイエシスの視角からプラク

シスの問題を考へようとするやうな傾向をもつて居るやうであるが、そこにはもとより多くの長所があると共に多少自覺的に警戒を要する點もなくはないであらう。もとより此の兩者の底には深く自己同一的なるものがあると考へられるが、しかしポイエシスは其自身直ちにプラクシスではない。筆者が第一にのべた様な點も恐らくは著者のかかる傾向と何らかの關聯があるのではないであらうか。序文にもある通り著者は既に此の點にも十分の自覺をもつて居られるやうであるが、筆者も亦近き將來に於て此の問題に對して出来るだけ深く缺を入れて見たいと思つてゐるものである。

とまれ長き病苦との戦を通して尙もその銳鋒をくじくことなく、今や學界の第一線に立つて此の名著を世に問ふ、西田、田邊兩先生によつて築かれた京都哲學の傳統は、既にほころびんとするこれら幾多の蕾によつて満庭の香氣馥郁たるものがある。兩先生もどんなにか力強く御喜びのことであらう。我が學界に恵まれた輝かしき未

來のために慶賀にたへない次第である。

(附記) 本書には此の外に「一打の鑿」及び「意志と行爲」の二篇がある。前者は數年前にかかれたものであるが既に「表現愛」への道が明かに踏み出されて居る、著者の天分の豊かさの最も美しく示されたものの一つとして注目に値するものである。(岩波書店刊 菊版二一九頁 定價貳圓)